

中国栽培バラの起源種 ロサ・キネンシス・スポンタネアを求めて

上 田 善 弘

栽培バラの起源地は世界に2ヶ所、香料用ダマスクローズ (*Rosa*×*damascena*) の起源地、西アジアからコーカサスにかけてのコウシンバラ (*R. chinensis*, *R.*×*odorata*) の起源地、中国四川省から雲南省が考えられます。後者のコウシンバラの成立には、四川省を中心に分布するロサ・キネンシス・スポンタネア (*R. chinensis* var. *spontanea*) と雲南省を中心に分布するロサ・ギガンテア (*R. gigantea*) が関わってきています (*R. gigantea* については花葉No. 16を参照)。

R. chinensis はオランダの植物学者ジャクウィーン (Nicolaus Joseph von Jacquin) がグロノヴィウス (Johan Frederik Gronovius) の腊葉標本をもとに、1768年に*R. chinensis*として新種記載をしたことに始まります。この標本は栽培型のものでしたので、後に発見された野生種には、*R. chinensis* var. *spontanea* の学名が付けられました。アイルランドのプラントハンター、A. ヘンリーが、1885年に初めて湖北省宜昌で野生種を発見し、リンネが記載した*R. indica* の野生型として報告しています。その後、本種はイギリスのE.H. ウィルソンにより四川省で発見されています。それ以降、中国は海外に門戸を閉ざし、長くその自生植物を海外の人たちが調査することができませんでした。日中の国交正常化に伴い、個人旅行が可能になり、著名な植物研究家、荻巣樹徳氏により、1983年に四川省雷波で*R. chinensis* var. *spontanea* が再発見されました。この荻巣氏の調査情報をもとに、私も2002年に初めて四川省に入りました。四川省では峨眉山、青城山など何か所を回りましたが、そこでは発見できず、成都の約300km北の平武でのみ*R. chinensis* var. *spontanea*を見ることができました。しかし、調査に入ったのが9月上旬で開花時期ではありませんでした。

その後、いつかは開花最盛期に調査したいと思っていたところ、昨年大阪工業大学の河村耕史准教授より、研究課題「栽培バラの四季咲き性の野生起源解明と有用遺伝資源の大規模スクリーニング」への協力を要請されました。まさに願ってもないチャンスとばかり、早速、調査地点の確認と現地での共同研究者への協力要請を行いました。2002年の調査でもお世話になった四川大学の王麗教授にも共同研究者として加わっていただき、調査には大学院生をつけていただきました。昨年は、これまでの情報から、開花期と予想した5月の連休の頃に調査に入りましたが、すでに開花が終わっていました。そこで、今年は昨年より2週間早く、4月17・18日の両日、四川省平武に入りました。自生地は標高700~1,000m、雑木二次林地帯の道路や川沿いに面した明るい場所です。*R. chinensis* var.

spontanea の特徴的な花色は、咲き始めがピンク色で、開花が進行するに従って、花色が濃くなり、開花終期には鮮やかな真紅色となります。この花色はヨーロッパのバラにはない特徴で、中国のバラが導入されることにより、栽培バラの花色の幅が広がることになりました。訪ねてみるとちょうど開花最盛期で、驚くほど幅広い花色の個体変異を見ることができました。真紅以外にピンク色の濃淡、さらには白や淡黄色、真紅色をベースとした白覆輪の個体まで見ることができました。また、この野生種が自生するところには必ず白花一重のモッコウバラ (*R. banksiae* var. *normalis*) が寄り添うように生えていました。

四季咲き性は*R. chinensis* var. *spontanea*のシュート伸長に関わる遺伝子 (KSN) に動く遺伝子 (トランスポゾン) が入り込み発現したことが解明されています。KSN遺伝子の塩基配列には種内変異があり、今後の研究では、四季咲き性がどの地域の *R. chinensis* var. *spontanea*に由来するのか、また、トランスポゾンが動くきっかけが何であったのか、今回の調査をふまえたさらなる解明が待たれます。



自生地の景観